中津神社

田崎神社

鉤（かぎ）引き祭

このお祭りは、２月の第３日曜日に行われる神木引きで、市無形民俗文化財に指定されています。当初は旧暦２月の卯の日に行われていました。起源は不詳ですが、300年以上前から伝わる農業生産の予祝行事です。

上（かみ）、下（しも）の地区に分かれ、祭りの当日の早朝、それぞれカギとなる長さ10mほどのサクラ、エノキ、ニレなどの堅い木を切り出し、根元がＶ字状のカギとレ状のカギをからませて引き合い、木が裂けるか、大きく引き込まれた方が負けとなります。勝った地区が豊作といわれ、また勝った側の木の枝は家内安全のお守りになるといわれています。別名「けんか祭り」ともいわれます。

056 鹿屋市の神社1

日本では古来から民俗信仰として高い山、森、老木、巨岩などを神聖なものととらえ、その周りに垣を造り、ひもろぎ[注1]を建て崇拝しました。文化が進むにつれて、拝所を建てたり、鳥居を造ったりして、現在の神社の基になっています。ここでは、鹿屋地域に所在する神社について紹介します。

○中津（なかつ）神社（鹿屋市上高隈町759）

この神社に祀られている神様は、中津少童命（ナカツワダツミノミコト）です。日本創生神の伊弉諾命（イザナギノミコト）が小戸（おど）の阿波岐原（あわきはら）で禊ぎをされた時に生まれた神で、天照大神（アマテラスオオミカミ）、須佐男命（スサノオノミコト）の姉兄神であり、全国八万社で唯一の祭神です。

神社は、1351（正平６）年頃に領主の肝付氏によって創建されました。ところが1608（慶長13）年に社殿が焼失し、その後建築に取りかかり1653（承応２）年に完成しました。この本殿が360有余年経った現在にも残っている本殿です。新田開発のため、現在地に移転され、2007（平成19）年に社殿の改築が行われました。

○七狩長田貫（ななかりおさたぬき）神社（鹿屋市田崎町517）（通称　かりおさ神社・田崎神社）

この神社に祀られている神様は、別雷命（ワケイカヅチノミコト）です。1504（永正元）年11月15日、伊勢の国の田丸玄蕃（たまるげんば）とい

菅原神社

う人が伊勢の国から神像を背負って来て創建したといわれています。また一説には、1383（永徳３）年12月24日、山城の国（現在の京都市付近）の加茂神社より分神したともいわれています。

○菅原神社（鹿屋市天神町 4014）（通称　荒平天神）

この神社に祀られている神様は、菅原道真公です。道真は平安時代の文章博士として詩歌、書道に秀で、遣唐使の廃止を進言した事でも知られ、宇多天皇の信任が厚い人でした。しかし藤原氏との政争に敗れ、太宰府に左遷され失意のうちに亡くなりました。彼の死後、都ではさまざまな天変地異があり、人々は道真の霊のたたりだとして、京都北野天満宮に「天神様」として祀り、学問の神様として信仰されています。

本神社の創建年代は不明ですが、戦国期または1532年～1555年（天文年間）頃と伝えられており、昔から地元住民の崇敬が篤く、毎月25日は縁日として多くの参拝者が訪れます。

県道68号線沿いにあって、海岸から海に突き出した岩山に建立されており、満潮時に海に浮かぶその様子から岩山は「天神島」とも呼ばれる神社とその風景は「鹿屋八景」にも選ばれており、周辺を含めて風光明媚な場所となっています。

注 1…ひもろぎとは、臨時に神を迎える依り代

田崎神社のクスの木とハートマーク

田崎神社には樹齢約950年といわれる大クスがあり、鹿屋市の文化財に指定されています。

また、本殿左側社務所近くにある銀杏の木にはハート型をした穴があります。これは自然にできたものだそうです。

利神社

諏訪両神社

057 鹿屋市の神社2

ここでは輝北地域に所在する神社を紹介していきます。

○利神社（輝北町上百引3215-2）

この神社に祀られている神様は、天兒屋根命です。

利神社は、輝北小学校の近くにある老桜に囲まれた社で、784（延暦３）年に藤原魚名が京都に創建したのが始まりです。1181（養和元）年、魚名の子孫である図師豊前守祐貞が利大明神を奉じて西原城へ赴任したことがきっかけです。当時、社殿は下百引にありましたが、たびたび堂篭川の氾濫に遭いました。そこで、1882（明治15）年、現在の上百引に移転しました。

例祭は11月17日で、明治末期まで浜戸下りの神輿、なぎなた舞、神舞などが奉じられていました。

○諏訪両神社（輝北町上百引1754）

この神社に祀られている神様は、建御名方尊と事代主命の二柱の神様です。

諏訪両神社は、国道504号沿いの諏訪集落下の水田地帯にあります。1558（永禄元）年に創建され、昔は付近に人家が立ち並び、にぎやかな町でした。

例祭は９月28日です。

諏訪両神社の古木

境内にあるイチョウ、イヌマキの古木は、1981（昭和56）年に輝北町指定文化財に指定されました。いずれも樹齢400年以上といわれています。

しかし、たび重なる台風襲来などにより現在は、イチョウのみとなってしまいました。

境内周辺のイヌマキの幹には約３cmの傷が無数にあります。この傷は昔、戦に臨む際、武運長久を願ってお守りとして神社より鉄の鎌を受け、無事帰還すると願ほどきの意味からこの神木へ打ち込んだ跡です。こうした風習は太平洋戦争まで続き、戦争の恐ろしさを樹内に包み込んでいます。

日枝神社

太玉神社

○日枝神社（輝北町市成1818）

この神社に祀られている神様は、大山祇神です。

日枝神社は、「山王さん」や「山王どん」の愛称で、周辺地域の人々に厚く信仰されている「牛馬の神」を祀る神社です。

1457（長禄元）年、肝付兼忠（高山城城主）と肝付兼秀（市成城城主）により建立されました。その後、肝付左馬守が再興、1873（明治６）年に現在の輝北町市成に移転されています。

例祭は４月第１申の日（現在は第２日曜）で、畜産まつりが行われています。

○太玉神社（輝北町市成2149）

この神社に祀られている神様は、太玉尊です。国道504号沿いの輝北町市成にあります。

創建は1362（正平16）年以前とあるだけで明らかではありません。輝北町市成の出生とされる太玉尊は「穀物の神」として崇められてきました。

例祭は３月１日で、「御田打」という行事が壮年たちによって行われ、今でも氏子たちにより例祭が続けられています。

祭事で使用していた仮面
（輝北歴史民俗資料館所蔵）

日枝神社畜産まつり

日枝神社の広場は、昔から武士の乗馬の鍛錬場や馬のせり市場など、畜産振興の場として広く利用されてきました。

現在も続く例祭では、家畜の安全を祈願し、畜産業がますます繁栄することを願って毎年４月第２日曜日に畜産まつりが日枝神社境内にて行われています。

このまつりでは、牛１頭が当たる抽選会があり、参加者に人気のイベントとなっています。また、ステージでは演芸大会や歌謡ショー、地元住民参加のカラオケ大会なども催されています。

八幡神社

鵜戸神社

八幡神社の移転

八幡神社は1871（明治４）年10月鹿児島県から大姶良麓の新八幡神社へ一緒に祀るよう指示がありました。しかし、吾平町は八幡神社を上名村の神様にして下さいと願い、中福良の田中神社の土地を八幡神社の土地と決め、吾平山上陵近くにあった鵜戸神社の建物をそこへ移し、今に至ります。

八幡神社には、煙草神社と鍬をもっためずらしい田の神様があります。

058 鹿屋市の神社3

ここでは吾平地域に所在する神社を紹介していきます。

○八幡神社（吾平町上名816）

この神社に祀られている神様は、応神天皇（15代天皇）・応神天皇の母神功皇后の他全部で６柱が祀られています。

1871（明治４）年10月頃、吾平総合支所隣から今の大字上名の中福良へ移されました。この八幡神社は、大隅正八幡（現在の鹿児島神宮）の四所の別宮の一つとして、姶良（吾平）の荘を開発をしていた平良宗が1043（長久４）年に建てたと伝えられています。

○鵜戸神社（吾平町麓3579）

この神社に祀られている神様は、鸕鷀草葺不合尊、玉依姫命、五瀬命、稲飯命、御毛入野命、神日本磐余彦尊６柱が祀られています。

1871（明治４）年に八幡神社が中福良へ移された後、吾平山上陵の川の向かい側にあった鵜戸神社を、現在の吾平総合支所隣へ移しました。今の建物は1964（昭和39）年に造り直したものです。境内には、愛宕様・馬頭観音・薬師様・正安の五輪塔・野町観音・護国殿・平和の碑などがあり、クス・カヤ・ムク・ハゼ・イチョウが大きく立派に育ち、森を作っています。

大川内神社

宮比神社

○大川内神社（吾平町麓椎実田5645-1）

この神社に祀られている神様は、神日本磐余彦尊と妻の吾平津媛、そしてご両親の彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊・玉依姫と祖父の彦火火出見尊の５柱が祀られています。

大川内神社は神野にあり、以前は麓村の神社でした。

○宮比神社（吾平町下名417）

この神社に祀られている神様は、天宇受売命です。下名の井神島にあり、別名高目神社といいます。

1544（天文13）年肝付家16代肝付兼続が健康で長生きすることを願い、建てたという記録があります。古事記によれば、天宇受売命が、天の岩屋戸の前で踊り、かくれていた天照大御神を引き出すことができ、神々の住んでいる場所や地上も自然と日が照り、明るくなったそうです。

○軍神社（吾平町上名6997）

この神社に祀られている神様は、石長比売です。石長比売と木花咲耶姫は姉妹で瓊瓊杵尊に嫁ぎますが、容姿を理由に石長比売だけ家に帰されます。寿命をつかさどる神様であった石長比売はこのことを恨んで、寿命の無いはずの神様である、瓊瓊杵尊や生まれてくる子どもを短命にしたとされています。

いくさの神（大川内神社、軍神社）

大川内神社の吾平津媛は、神武東征に子の手研耳命を同行させ、自身は吾平の地で、夫やわが子の御東征成功と無事を祈りました。そして、その成功から今では「いくさの神」と崇められています。しかし、手研耳命は御東征後に反逆の罪で異母兄弟から殺害されています。

軍神社に祀られている石長比売は、寿命を司る神であることから後に「いくさの神」としても崇められます。どちらも、非業の経験をしていますが、今では「いくさの神」として地域の人々から大切に守られています。

軍神社

月読神社

万八千神社の神事

万八千神社は、奈良時代に社司である石塚左近の祖先が都からこの地にやってきたことがきっかけで建てられた神社です。この神社では初め、「本社山城国賀茂大明神・下総国香取大明神・常陸国鹿島大明神」の３柱の神を安置していたという記録が残っています。また、万八千神社には祀られている神々に由緒の深い宝物や日常で使われていた道具、衣装類などが置かれています。

万八千神社では、旧暦の６月28日に鹿屋市の船間海岸で特殊な神事を行っていて、船間海岸には神社に伝わる舟つなぎ石があり、この舟つなぎ石にしめ縄を張ってお祓い等を行います。その後、海岸から帰ってくる途中にある橋口屋敷の石のほこらに塩を供えて、再びお祓いを行うという神事です。この神事は夏越祭の本番前に行われていて、夏越祭における神事は、藩政時代から欠かさず継承されています。

059 鹿屋市の神社4

ここでは串良地域に所在する神社を紹介していきます。

○月読神社（串良町有里3134）

この神社に祀られている神様は、月読尊や国常立尊のほか４柱です。

この神社は十五社大明神の末社であると言われています。また、元々は細山田にありましたが、1397（明応４）年に鶴亀城を攻略した島津豊後守忠朝が現在の宮ノ下に移したと言い伝えられています。

○事代主神社（串良町岡崎1785）

この神社に祀られている神様は、事代主命や下照姫命、南方刀美命です。

この神社は大隅国が建国される前、飛鳥時代から奈良時代の間に創建されたと言われています。また、事代主神社は1118年～1120年（元永年間）以降８回ほど再興されたという記録も残っています。祈年祭や棒踊り、夏越祭など、地域に根付いた様々な年中行事が行われています。

○万八千神社（串良町下小原4857）

この神社に祀られている神様は、別雷神や経津主神、武甕槌神、倉稲魂神です。

十五社神社での鉤引き祭り

十五社神社の様子

この神社は、山城賀茂の宮という京都の本社から神霊を分けて祀った神社であると言われています。

○山宮神社（串良町細山田3530）

この神社に祀られている神様は、素戔嗚尊です。

この神社は十五社神社の末社であると言われていますが、記録書によってはそのような事実が記載されておらず、神社が建てられた時期は不明です。またこの神社では、その年の豊凶を占う春祭りが有名で、鹿児島県指定無形民俗文化財に指定されています。

[項目 069 参照]

○霧島神社（串良町細山田445）

この神社に祀られている神様は、瓊瓊杵尊や木花之開耶姫です。

由緒は明らかになっていませんが、この地域には天照大神の命令を受けて孫の瓊瓊杵尊が降臨し、この霧島山から天下を治めたとの言い伝えが語り継がれています。また、霧島神社には昔の神社の歴史を物語る巨大な鬼瓦２個が現存しています。

○白山神社（串良町上小原5429）

この神社に祀られている神様は、菊理姫命です。

この神社は旧万八千大明神の末社でしたが、1870（明治３）年に太政官布告による１村１社令に基づいて、現在地に創祀されました。

十五社神社のいわれ

十五社神社は、串良町有里2525にあります。

この神社には、伊邪那岐尊や伊邪那美尊が祭神として祀られていて、現在でも新年祭や新嘗祭など、様々な祭が行われています。

十五社神社は、同じく串良町有里にある月読神社の母神であると古くから言い伝えられています。さらに582年、仏教伝来に起因する神仏戦争に破れた物部守屋が日向国に逃れてきたことがきっかけで、この神社が建てられたといわれています。

物部守屋は戦争に負けた後、細山田の一之宮ヶ宇都という場所に引きこもって暮らしていました。その後、彼は先祖である15の神々を祀り、場所を有里に移してからも神様を祀り続けました。後に、その場所が十五社神社と呼ばれるようになるのです。

この神社の祈年祭では、鉤引き祭りと似た祭りや種子蒔き神事など豊作を祈願する神事が行われています。

広葉山の葉（前）杉の葉（奥）

広葉山

中国の杉で、樹齢は400年と推定されています。岩屋近くの事務所の斜め向かいに１本だけ立っています。

吾平山上陵が登場する歴史書

ひとつは日本書紀で神代下に「ウガヤフキアエズノミコトは、西洲の宮でお隠れになった。それで日向の吾平山上陵に葬った。」とあります。次に見られる文献は、延喜式の諸陵寮です。

延喜式諸陵寮
「ウガヤフキアエズノミコトの吾平山上陵は日向国に在って、陵戸（陵を世襲で守る人）はない。」と読み取れます。

060 「吾平山上陵」が導く歴史ロマン

アマテラスオオミカミは皇室の祖とされる神で、その孫、ニニギノミコトは高天原から高千穂峰に天下ったといいます。その後の系譜はニニギノミコト―ホホデミノミコト―ウガヤフキアエズノミコト―神武天皇と続きます。

吾平山上陵は、鹿児島県鹿屋市吾平町上名にある皇族陵（お墓）で宮内庁によりウガヤフキアエズ陵に治定（遺跡や古墳の由来を認定する事）されています。鹿児島県内には３つの御陵があり、他に可愛山陵（ニニギノミコト陵）・高屋山上陵（ホホデミノミコト陵）があり、これを総称して神代三山陵といいます。延喜式諸陵寮では「日向吾平山上陵」とあり、他の陵墓のように郡名・兆域は記載されていません。また「在日向国、無陵戸」とのみ記され、陵を世襲で守る陵戸も置かれていません。皇族の祖の陵墓が場所も記載されず、陵戸もいないのは不思議です。おそらく『延喜式』当時には所在が失われていたというのが無理のない推測でしょう。これは県内の他の２つの山陵にも当てはまります。吾平山上陵が治定されたのは1874（明治７）年の事で明治政府によってなされました。実はそれ以前に神代三山陵を見つけようと多くの人が努力しています。例えば薩摩藩の国学者嚆矢白尾国柱はその

○岩屋は東北に向かい、入口の高さは3m少し、奥行きが14.5m、横幅が23.6mあり、広さは297㎡(約90坪、180畳ほど)。その中に、高さ1.3m、周囲5m、その横に高さ0.9m、周囲3mの円形の塚が二つあります。大きい方がウガヤフキアエズノミコト、小さい方がタマヨリヒメの御陵と言われています。岩屋の中の御陵は、全国でも類を見ない貴重なものです。

説を本居宣長が認めた事で有名になりました。吾平山上陵の位置は明治時代からほとんどの学者が現在の位置を認めています。なぜなら吾平は鹿児島に1か所しかないからです。吾平山上陵と極めて関係が深いと思われる、かつては鵜戸六所権現、鵜殿神社などと称された神社が吾平山上陵の東側に位置し、747（天平19）年に「六所大権現と号した」という記録があります。また、吾平山上陵内には「鵜戸六社権現」がありましたが、1871（明治4）年の災害により、陵外の鹿屋市吾平町麓（ふもと）に移り、名称も鵜戸神社に改められています。本殿は1043（長久4）年建立とされ、社殿は1660年代に島津綱貴（つなたか）（島津20代当主）が、宝殿と拝殿は1768（明和5）年に島津重豪（しげひで）（25代当主）がそれぞれ造営しました。

また、飴屋敷跡（あめやしきあと）が吾平町鶴峰地区にあります。ウガヤフキアエズノミコトの母はトヨタマヒメといい、本当の姿は「わに（サメ）」でした。出産の際に本当の姿を夫のヤマサチヒコに見られてしまったのを恥じて海に帰ってしまいました。乳飲（ちの）み子（こ）を残されたヤマサチヒコは悲嘆にくれました。そこに一人の老婆が現れ、乳母の代わりに飴を練り、その飴のおかげで成育できました。吾平町上名にある飴屋敷跡はその飴（あめ）を差し上げた人の住宅跡（あと）と伝えられています。

吾平山上陵の読み方

正式な呼び名は「あいらのやまのうえのみささぎ」といいますが、鹿屋地域はもちろん、県内外多くの方々から「あいらさんりょう」と呼ばれています。

行幸記念碑

項目054にある昭和天皇の行幸の記念碑を1936（昭和11）年11月に公爵の島津忠重が建立しました。

飴屋敷跡

玉泉寺跡の住職の供養墓など

玉泉寺公園

061 鹿屋市の寺院１

鹿屋市には由緒（ゆいしょ）のある寺などが多いです。ここでは、姶良名勝志などの古記録に記されているものを地域ごとに紹介します。

○清池山玉泉寺跡（ぎょくせんじあと）（玉泉寺公園）

吾平町上名にある清池山玉泉寺跡は、赤野の南の龍喰（たつばん）という地区にあります。宗派は曹洞宗で、祀ってある仏は如意輪観音（にょいりんかんのん）です。下野国（現栃木県）の泉渓寺（せんけいじ）の支配下にある小さい寺です。寺を初めて建てたのは源翁和尚（げんのうおしょう）、宗派などを作ったのは玉広守泉禅伯と伝えられています。

源翁和尚は1395（応永（おうえい）２）年、赤野に来て玉泉寺を建て、ここで亡くなり、玉泉寺内に石の塔（源翁塔）が建てられたといいます。玉泉寺の資産は1677（延宝（えんぽう）５）年10石、1707（宝永（ほうえい）４）年22石でした。1659（万治（まんじ）２）年玉泉寺の前に池を掘り、豊富な湧き水を利用し溝をたて、畑を開いて新しく田んぼにするのに７年かかり、およそ450石の資産を増やしたと伝えられています。

玉泉寺は約470年間人々のために力を尽くしてきた立派な寺でしたが、1868（明治元）年、廃仏毀釈によって無くなりました。玉泉寺跡には、源翁和尚など

含粒寺跡の石冊（吾平町）

の供養塔が約20基あり、1983（昭和58）年玉泉寺児童公園（後の玉泉寺公園）が造られ、史跡と花のきれいな場所として知られています。

○宝蛇山含粒寺跡

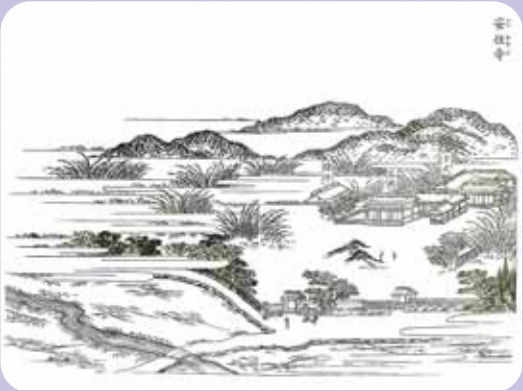
吾平町上名にある宝陀山含粒寺跡は、上名の門前にあります。曹洞宗玉龍山福昌寺（鹿児島市に現在跡地として残されている）の含粒寺の支配下にあった小さい寺です。寺を初めて建てたのは仲翁和尚（７代島津元久の長男、福昌寺３代目住職）です。９代島津忠国は1429（永享元）年吾平に含粒寺を建て仲翁和尚を招きました。仲翁和尚は1445（文安２）年６月７日に67歳にて含粒寺で亡くなり、寺の中に石の塔があります。仲翁和尚の母、妹、御南御前の３人の墓もありました。含粒寺は約440年間栄え、吾平町の位牌を代々守っていましたが、1869（明治２）年、廃仏毀釈により無くなりました。含粒寺跡にはお坊さん等の墓が約50基あります。

その後、上名にあった含粒寺と鹿屋市の南町にあった元朗寺を合体させて、今の含粒寺（南町）になりました。仁王像や地蔵、観音、薬師などが残っています。

含粒寺跡（吾平町）

含粒寺石像群（南町）

位　牌
猛誉和尚の字が読み取れる



安住寺
三国名勝図から転載

062 鹿屋市の寺院２

ここでは、串良地域と輝北地域の寺院跡などを紹介していきます。

○瑞雲山安住寺

串良町にあった曹洞宗のお寺。姶良郡福山の大安寺の末寺です。1532（天文元）年鹿屋の打馬において三峯山華善寺として開山後串良に移しました。肝付氏の没落と共に一時志布志蓬原に移すも、天正初期（安土桃山初期）に串良地頭島津忠長の代に再び串良に移して安住寺と改称。1867（慶応３）年に廃仏毀釈により廃寺となりました。

○高栄寺

串良町にあった寺で、設置の理由、年代、由緒、宗派さえも不詳とされています。しかし、高栄寺の僧である「猛誉和尚」は名僧であると評されています。

○法城山両足寺

輝北町にあった寺院。設置の理由、年代、由緒、宗派さえも不詳とされています。しかし、その山門には一対の仁王像が据えられていたようで、現在も輝北町市成に仁王像が現存しています。

この仁王像は昔から風邪（百日咳）を治す仁王さま

猛誉和尚

串良町に存在したとされる高栄寺の僧で、名僧との呼び声が高いです。

亡くなる際、自ら墓穴を掘って入寂（僧が死ぬこと）しました。遺言で、「所有していた鐘の音が途絶えたならば自らは死んだということだ」と残しました。その後、1618（元和４）年11月16日に鐘の音が途絶えたそうです。

門下生たちは僧の徳を慕い、毎月16日には鐘を打ち鳴らして和尚の霊を弔うという行事を行っていました。和尚の死後370年経った今なお、岡留上町内会の宝印堂においてその行事は継承されています。和尚がいかに名僧と評されていたかが分かります。

串良にある祠

輝北町市成の仁王像
左が「吽」像、右が「阿」像

祓川町瀬戸山神社前の瀬戸山公園内
五代寺跡の仁王像（「阿」像、「吽」像）

として住民に親しまれ、病が治ると火吹き竹を供えていたようです。市成が島津家の支流敷根氏の所領であった頃、両足寺の山門に据えられた室町時代の作と伝えられています。廃仏毀釈の被害を免れるために地中に埋められていたものが、後年、掘り起こされ現在の場所に安置されました。

口を開けている像を「阿」像、口を結んでいる像を「吽」像といいます。阿吽とは仏教の真言の一つで、口を大きく開いた「あ」から始まり、口を完全に閉じた「ん」で終わることから、宇宙の始まりから終わりまでを表す言葉とされてます。仁王像は金剛力士像とも呼ばれ、よく寺院の入り口の門の左右に二体一対で阿吽の呼吸で仏法を守っています。

「吽」像の表情

「阿」像の表情

南町の含粒寺仁王像

「阿」像

「吽」像

長谷観音像

長谷観音堂
三国名勝図から転載

長谷観音（祓川）のいわれ

昔、都から祓川に来た炭焼五郎治という者が、妻をめとり炭を作り暮らしていた。ある日、山で作業をしていると、銅の出る場所を見つけた。五郎治は銅を堀り都で売り、彼は都でも指折りの大金持ちになった。

彼は都にいたときから長谷寺（鎌倉）の観音様を深く信仰し、大金持ちになったのもそのおかげだと感謝していたので、長谷寺の観音様にお参りをし、その姿を丁寧に書き写し、それをもとに観音様の像を彫ってもらい、祓川にお祀りした。

明治時代に全ての寺や仏像をこわすよう命令が出され、祓川の人々も、観音様を泣く泣く高山の宮下の大川に流すことになった。

ところが、観音様は深い渕に立ったまま、少しも流れない。これを見た宮下の人々はお堂をつくりお祀りした。それを聞いた祓川の人々は、再び観音様を元の場所にお祀りし、現在でも観音様は祓川で大切に祀られている。

063 鹿屋市の昔話

鹿屋にも昔から語り継がれる地域に根差した話があります。ここではその一部を紹介していきます。

○猿と蟹ん寄合餅

昔猿と蟹がいた。正月が近づき、蟹が猿に餅をつこうと言った。蟹は川で餅米を、猿は山で杵の木を探した。蟹は餅米を手に入れ帰ってくると、猿は曲がった木で作った杵で餅をつこうとした。しかし蟹は、その杵が気に入らず木を探しに山へ向かった。その間に猿は餅をついた。戻ってきた蟹がその餅を分けるように言ったが、猿は食べたかったら木の上まで来いと取り合わない。蟹は美味しく食べる方法があると猿を騙し、木から落とした。怒った猿は、食べられないよう餅に糞をかけようとしたが、蟹はお尻を鋏ではさんだ。猿はそのまま逃げだした。このことがあってから、猿の顔と尻は赤くなり、蟹の鋏には猿の毛がついたままなのである。

○波見穴

昔、高須波之上神社の神様が大しけにあった。船が沈みかけた時、大亀とニベ（魚）が現れて神様を助けた。神様は大亀とニベのおかげで岸に打ち付けられ助かった。それから、人々はここを打ち付け平（ウチツビラ）と呼ぶようになった。また、高須の

波之上神社と高須の町並み

人々は長く亀とニベは食べなかった。ウチツビラは西南に開聞岳、北に桜島を望む景色の美しい所である。ここには大きな洞穴があり、ある人がこの洞穴に白い犬と、白い鶏を入れた。犬は戻ってきたが、鶏は戻ってこなかった。やがてその鶏は洞穴から遠い波見（肝付町）の海岸に出てきたそうだ。それ以来、この洞穴を波見穴と呼ぶようになった。

○祓川の「猫講」

昔、祓川に猫好きのお婆さんがいた。その猫好きは有名で、いろいろな猫を飼っていた。特に「ヤス猫」という猫をかわいがった。ヤス猫はとても利口で、村人が畑仕事をしているとお昼前にやってきて、「もうお昼ですよ」というように大きな声で鳴いて知らせるのだった。ところが、ヤス猫が急に姿を消した。お婆さんは探し回った。何日たっても、ヤス猫は帰らなかった。そんなある日のこと、村人が観音様の下の井手の竹でヤスの死体を見つけた。お婆さんは泣き、悲しんだ。ヤスを家に連れて帰ると、お婆さんは墓を建て、丁寧に弔った。その頃「猫使い」が村に現れ、「ヤス猫の祟りが来るぞ」と、村人からお金や品物をだまし取ろうとした。怒った村人は、ヤスの墓石を取り外してサコンタロ（水力で米をつく道具）の臼にした。しかし村人は猫を大切にし、猫の敵である犬は飼わなかった。お婆さんの子孫たちは、「猫講」というお祭りをし、ヤス猫の魂を慰めている。

狐をだました話

今から120年ほど前のこと、大姶良村に三郎という若い男がいた。三郎はある日、鹿屋に買い物に出かけたが、帰りが遅くなってしまった。

暗闇を帰っていると、後ろに何者かがついてくる気配がした。三郎が暗闇で目を凝らすと、暗闇には狐が１匹いた。自分の荷物の干魚を狙っていることに気付いた三郎は、じっと狐を見つめた。

すると、狐はぐるぐると３回ほど回ったと思うと、狐は友達の休助に姿を変えた。狐の休助は三郎に近づき、「おまえが持っちょる荷物の持っ加勢をしてやろうか」といった。あまりにもそっくりなので、危うく渡しそうになったが、休助をよく見ると、腰の辺りに狐の尻尾が見えている。

三郎は「こりゃ、ばか狐、だまされはせんど」といきなりどなった。狐の休助は30mほど飛び上がり、すっとんでいった。その姿を見た三郎は高笑いをし、我が家に向かって歩き出した。

ぎっちんこ（でんぷん団子汁）

がね

ななとこずし（七草がゆ）

鹿児島では７歳になる子ども達が七草の日に「七草詣り」をする風習があります。

七草がゆは、一年間の邪気を取り除き、万病を防ぐといわれ、お宮参りの後に、７軒の家庭から「七草がゆ」をもらって健やかな成長を願うものです。

７か所からいただくので「ななとこずし」と言われます。

「ずし」とは寿司ではなく鹿児島弁で混ぜご飯や雑炊などのことを指します。作り方は、だし汁に、洗った米と野菜を食べやすい大きさに切ったものを一緒にして中火にかけ、しばらく煮ます。柔らかくなったら、塩・薄口しょうゆを加えて味を整え、餅を入れてすぐ火を止めて、蓋をしてしばらく置き、最後に青葉を加えて出来上がりです。

064 郷土料理１

郷土料理１では、鹿屋で昔から食されていた、今では、なかなか食べることがなかったり、今でも親戚の集まりなどで出てくるような昔懐かしい料理を紹介します。

○ぎっちんこ（でんぷん団子汁）

戦時中の一般に言うスイトンです。食料が無いのでででんぷんの粉を熱湯でかきまぜて団子を作り菜っ葉と煮ます。そういった質素な料理が、戦後の冬の寒い時期に欠かせない料理へと変わり、このでんぷん団子の汁が体を温めてくれる具だくさんの母の味として、昭和４０年代から浸透しました。

○がね

「がね」は鹿児島県の特産品としてさつまいもを食材とした郷土料理です。さつまいもや野菜を太めの千切りにし、衣をつけて揚げる料理です。揚げた形が「かに」に似ているので、鹿児島弁の「かに」＝「がね」といいます。

年間を通して食べられ、おかずや子どものおやつ、酒の肴（さかな）として食べられています。そのほかにも、正月料理や葬式などの冠婚葬祭（かんこんそうさい）の際にも振（ふ）る舞（ま）われます。

混ぜ飯

落花生豆腐

○煮しめ

日本古来より伝わる家庭料理の一つです。名前の由来は、“ 煮汁が少なくなるまで時間をかけてじっくり煮る ” という調理法の「煮しめる」からきています。

おせち料理の元祖とも言われており、お正月、祝い事、節句など人がたくさん集まるときにも振る舞われてきた縁起の良い料理です。

○混ぜ飯

地域での行事や人の集まる祝い事のときによく出されます。

具飯とも呼ばれ、鶏肉、ごぼう、人参、干ししいたけ、たけのこ、油揚げなど具材を細かく切って炒め、醤油や砂糖で味付けしたものを炊き立ての温かいご飯に混ぜます。

具材には様々なバリエーションがあり、こんにゃくやかまぼこ、ごぼうが入ったり、海に近い地域ではチヌ（タイ）やツベタ（マキガイ）を入れたり、大根の収穫の時期にたっぷり入れたものがあるなど地域や家庭によって違いがあります。

落花生豆腐（だっきしょどうふ）

落花生は1700（元禄13）年ごろに、中国の南京から伝えられたので、南京豆とも呼ばれます。花が咲いた後、土の中で豆が育つことから落花生という名前がつきました。

鹿屋市や奄美地方で多く生産されています。

落花生は、栄養的にタンパク質、脂肪、ビタミンB１・B２を多く含んだ食品です。

「落花生豆腐」は、さつまいもでん粉を使った代表的なものであり、精進料理や各種行事のときなど、現在でもよく作られています。

落花生豆腐の材料
（採れたての落花生）

そまげ

ねったぼ

065 郷土料理2

郷土料理２でも昔懐かしい料理、特に子供に人気があった料理を紹介します。

○そまげ

鹿児島県の郷土料理の「そまげ」は、さつまいもを煮て、熱々のうちにつぶしたところにそば粉を加えて丸めたものにきな粉をまぶして食べていました。「そまげ」の「そま」はそばのことで、「げ」はおかゆのことです。

べたつくことから「やっけなそまげ、あぶれば灰がつっ」という言葉もあったそうです。

○ねったぼ

「ねったぼ」は、さつまいもが主食だったころ、おはぎを食べる思いで、さつまいもと餅を一緒に蒸し、練りあげて丸め、お茶うけやおやつにしたものです。

「ねったぼ」の名の由来については、“練ったぼたもち”からきたという説や、餅を“ぼったぼったと練ってつく”などの諸説があります。

○ふっのもつ

「ふっ」とは、鹿児島弁でよもぎのことです。節句用の餅として、新芽の出たよもぎと米、黒砂糖を混ぜ、一握りずつ握りよもぎ餅とします。

今では味わえない銘酒1

○日本酒桜川

今では名を知る人もなく、醸造も絶えていますが、藩政時代においては大隅半島中唯一の酒屋である木下家が醸造していました。

この酒は、一名鹿屋酒、またはあられ酒と称され、藩主島津家はもちろんのこと、琉球王公にも献上されていました。酒名を「桜川」と命名したのは琉球王公で、あられ酒が、まるで桜の散るような状態に見えたので、王公はこれを桜川と名付け、改めたといいます。

島津公が賓客のために饗宴を催すとき、あるいは高貴の方に対する用酒には、この桜川と限定されていたほどでした。

しかし幕末から明治にかけて2回の火災に遭い、家宝、什器や貴重な古文書なども焼失し、また時勢の推移に順応できず衰微してしまいました。

現在本町に居住している木下家に箱入りの提灯が残っています。なお、看板は鹿児島市にある鹿児島県歴史・美術センター黎明館に寄贈されています。

豚味噌

ふくれ菓子

○豚味噌

豚味噌は、鹿児島県を代表する食材である豚肉を使った料理です。

年間を通して常備菜として重宝します。ご飯のお供に、野菜スティックにつけたり、冷奴にのせたり、野菜炒めの仕上げに使っても美味しいです。豚バラ肉を、包丁で細かく切り、しょうがは細切りにします。フライパンに豚バラ肉を入れて弱火でじっくり炒め、肉から油が出てきたら、しょうがと味噌を加えてさっと炒めます。仕上げに、砂糖・料理酒・みりんを入れてよく混ぜ合わせてできあがりです。

味噌は麦味噌が豚肉と合いますが、無ければ他の味噌でも構いません。

○ふくれ菓子

鹿児島県において黒糖が甘味料として強く根づいたのは江戸時代といわれています。

琉球王国を支配していた薩摩藩が、琉球や奄美地域で行われているさとうきびの栽培や、黒砂糖の製造を独占し、薩摩藩の有力な財源としていたことがきっかけだと考えられています。

かつては、豊作を願う祭りの席や農作業時のお茶うけとして食べられていました。現在は、時期を問わず食べられています。

黒砂糖を入れたものが定番ですが、よもぎやココア、ドライフルーツなどを入れても美味しいです。

今では味わえない銘酒2

看板は「御用酒櫻川」と表裏面ともに大書された浮出彫のもので、金箔を着せた豪華なものです。板木の厚さ6㎝、幅50㎝、長さ1m余の一枚板で、縁を造り2個の丈夫な金具が付けられています。

提灯は箱入りで、箱には「十文字御紋付御桃灯入」と朱で漆書してあります。もちろん中の提灯は、長い間使用されていないので古び、紙も破れています。

醸造に欠くことのできないものは水ですが、その水については2説あります。

1説は宅地内の井戸水を使用したというものです。他の説では、鹿屋城（現在は城山公園）内の豊富な湧き水を使っていたとも伝えられています。

鹿児島県歴史・美術センター黎明館に寄贈されている看板

神川酒造

小鹿酒造

茹(ゆ)で落花生

大隅地域では茹で落花生は人が集まった時や飲み会の時に出される郷土料理です。

鹿屋では、殻(から)のまま茹でた落花生を誰しも食べたことがあるのではないでしょうか。

あの塩加減と何とも言えない食感。そして、豆の濃厚な味わいが口の中に広がります。

特に、運動会シーズンの子どものおやつ代わりによく出され、地域の人々に愛された「だっきしょ」です。

そして、焼酎(しょうちゅう)にも良くあい、焼酎のあてとしても良く出されます。

茹で落花生

066 郷土料理3

郷土料理３は、地元の料理に合うお酒の話です。

世界の酒で、地理的表示が認められているのは、ワインのボルドー、シャンパーニュ、ブランデーのコニャック等があり、鹿児島の焼酎も、2005（平成17）年にWTO加盟国間の国際的な知的所有権の保護規定であるTRIPS（トリプス）協定に基づき、地理的表示として「薩摩(さつま)」が厳格な条件の下に認められました。

少し歴史を遡(さかのぼ)って、焼酎王国と呼ばれるほどの鹿児島には1970（昭和45）年頃までは地域に焼酎工場が多数点在していました。しかし、大手メーカーに対抗すべく複数の酒造会社が協業化するという動きが起こりました。そして現在の鹿屋市内では、下記の３社の酒造会社が薩摩焼酎を製造しています。

○有限会社神川(かみかわ)酒造

大根占町神川（現錦江町）にあった神川酒造の製造免許を、小鹿酒造の当時の役員が出資して、1988（昭和63）年に引継ぎ、その名を残しました。現在の永野田町に1990（平成２）年に新工場が完成しました。

2022（令和４）年現在、主に３種類のレギュラー商品と２種類の限定流通商品で展開しており、小規模ながらこだわりを持った焼酎造りが行われています。

大海酒造(創業時航空写真)

黒ぢょか

○小鹿酒造株式会社

吾平町上名に、鹿屋市、東串良町、吾平町、佐多町の４酒造会社が均等出資の基に協業組合として1971（昭和46）年に設立され、「小鹿」としての販売を開始。1978（昭和53）年には鹿屋市の２企業が新たに加入し、2007（平成19）年に小鹿酒造株式会社となり現在にいたります。

仕込みには、湧水が豊富な玉泉寺公園からの水を利用しており、現在、本格焼酎「小鹿」を筆頭に、10種類以上のレギュラー商品群と各種限定品をそろえ、自然と地元への感謝の心を大切に焼酎造りが行われています。

○大海酒造株式会社

1975（昭和50）年、鹿屋市白崎町に地域の９つの酒造会社が集結して大海酒造協業組合を設立し、代表銘柄「さつま大海」の販売を開始。2012（平成24）年に大海酒造株式会社となり現在にいたります。

地元鹿屋の契約農家が栽培した新鮮な芋にこだわり、杜氏を中心に、機械に頼り過ぎない造り手の五感を活かした妥協しない焼酎造りを信条として、蔵人は蔵に寝泊まりして真摯に焼酎造りに向き合っており、現在、「さつま大海」を始め20種類以上のレギュラー商品群と各種限定商品をそろえ、全国展開されています。

鳥刺し

鳥刺しも鹿児島ならではの食べ物の一つです。

ほかでは、宮崎の一部等で食べられているようです。

鳥刺しを口に含むと、鶏肉の旨味が口の中いっぱいに広がります。そして、鹿児島ならではの甘口醤油がその旨味に追い打ちをかけます。さらに薬味の生姜やニンニクが口の中に深い味わいを広げます。

仕上げは焼酎です。芋焼酎の優しい甘みと後味のキレの良さが、口の中に広がる鳥刺しの旨味をサラッと喉の奥に流し込んでくれます。そして、また一口。

ご飯にも、地元の焼酎にも良くあう郷土料理です。

【鹿児島県HP】
生食用食鳥肉等の安全確保について

鹿屋競馬場写真
1963（昭和38）年頃

現在の地図に当時の競馬場の場所を重ねた図

競馬場跡の現在
提供：国土地理院

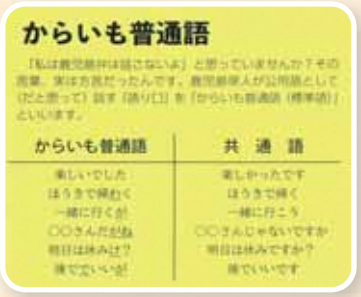
方言は地方の宝

方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、美しく豊かな言葉のひとつとして位置づけることができます。後世に受け継ぐべきかけがえのない宝です。

鹿児島県では、毎年11月の第３週を「鹿児島県方言週間」として定めています。

ひとつ鹿児島方言を紹介します。

「まだつこがなって、あったらしかこつしやんな」これは、「まだ使えるのに、もったいないことをするな」という意味になります。



からいも普通語

「私は鹿児島弁は話さないよ」と思っていませんか？その言葉、実は方言だったんです。鹿児島県人が公用語として（だと思って）話す「語り口」を「からいも普通語（標準語）」といいます。

からいも普通語	共通語
楽しいでした	楽しかったです
ほうきで掃ぐく	ほうきで掃く
一緒に行くが	一緒に行こう
○○さんだがね	○○さんじゃないですか
明日は休みけ？	明日は休みですか？
後で行いっが	後でいいです

067 大人・子どもの楽しみ

昔の鹿屋の人々はどのような楽しみに興じていたのでしょうか。代表的なものを紹介します。

○鹿屋競馬場

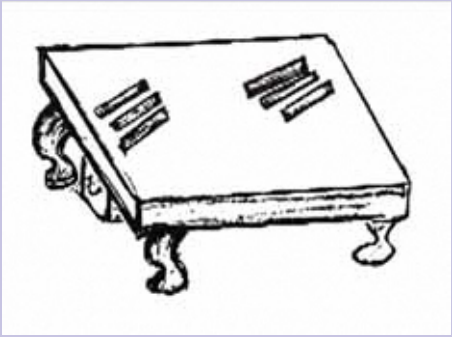
住宅地が広がる鹿屋市札元１丁目辺りには、かつて「鹿屋競馬場」がありました。1929（昭和４）年に西原地区から移転したこの競馬場では、1965（昭和40）年ごろまで公営の草競馬が開催され、手に汗握るレースが行われていました。

競馬場の直線やカーブの一部は、現在も道路として残っており、地図上でもその名残を確認することができます。

○大人・子どもの遊び

「薩摩拳」

鹿児島県と宮崎県に伝わる酒席での伝統的な盤上遊戯で、「なんこ」と呼ばれています。10cmほどの木の棒数本を使って、お互いの手の中にある本数を当てる遊びです。現代でも大人も子供も楽しめる遊びですが、大人は酒の席で、負けた者が杯一杯の焼酎を飲み干すなどのルールを作り楽しみます。



薩摩拳(通称：なんこ)

はまとクラブのようなもの

「はま投げ」

正月遊びの一つで、これには年少の者は参加できず、12・13歳以上の男の子たちが、集落対抗で試合をしていました。

はまは、直径2、30㎝ぐらいの生の樫の木を厚さ5、6㎝に輪切りにします。はまを投げると、向こうではゴルフのクラブのようなもので受け止めて打ち返します。打ち返されたはまは、カーンと高く跳ね上がって飛んでいきます。少し危険な遊びではありますが、勇壮で面白いです。

「遊戯」

子供たちの遊びは実に種類が多いものでした。鹿狩りや、なわとび、ぶらんこ、石けり、かごめかごめ、鬼あそび、陣取り、片足跳び、人形遊び、ままごと遊びなどがありました。戦後もしばらく行われていたこれらの遊びも2、3を除いてほとんどが姿を消してしまい、ハイテクを駆使した今の子供たちの遊びを見ると、まさに隔世の感があるようです。要するに昔はお金のかからない道具で遊んだものでした。

野口雨情との関係

野口雨情は1940（昭和15）年のころから４年間、全国各地を順訪し、地方小唄を作詞しています。

雨情が「鹿屋小唄」を作るために、鹿屋を訪れたのは1940（昭和15）年５月です。野口雨情詩碑が、鹿屋市の城山公園の鹿屋城（亀鶴城）跡の広場に建っています。 ［項目023参照］

生活（衣・食・住）

古代の竪穴式住居にも流行がありました。弥生時代に、円や四角といった単純な形ではなく、小部屋の様な場所を追加することが流行します。

真上から見ると花が開いたように見えるものもあり、「花弁状間仕切住居」と呼ばれます。 ［項目033参照］